

生活 · 風習



時計塔のある町

長い年月の時空を経て、風雪にさらされながら、町の片隅でひつむらと住民の暮らしを見守るよつとして時を刻み続けていふ、寺方町一区にある赤いレンガ造りの時計塔をばし存知でしようか。

この時計塔は、昭和二年、昭和天皇の即位（御大典）を記念して、当時の青年団第一支部（寺方町一区）の団員の手によつて作製されたものです。

その頃、神前地区では、日本の輸出第一位を占めていた生糸の生産を支える養蚕が盛んで、神前の大半の農家が蚕を飼つていました。また高角町には、三、四軒の製糸工場もあつて、人家の周囲には見渡す限り桑畠が広がり、桑の木の新緑の頃には、あたり一面が緑の樹海と化し、若葉風にのつてさわやかな香りが漂つてきました。

春蚕、夏蚕、晚秋蚕と年三回の養蚕の季節を迎えると、養蚕農家では、桑摘みの作業で多忙を極め、朝早くから桑摘みに出なければなりませんでした。

当時は、畑に出て終日桑摘みの作業に従事する人たちにとって、時を知るいとは容易で

なぐ、朝夕の寺院から流れこくる鐘の音にて時刻を知るといった、大変不自由な思いをしていました。

そうした状況の中での時計塔の出現は、まさに画期的なものであったのではないでしょ
うか。当時の時計はゼンマイ式時計で、週に一回ほどネジを巻かなければなりませんでし
たが、屋外においても時を知るこ
とができる便利さに、畑に出て
働く人々から大変喜ばれまし
た。

こうしてみんなから喜ばれ、
村のシンボル的な存在の時計塔
でしたが、やがて第二次世界大
戦が勃発し、戦争の最中、突然
に時計が動きを止めてしまいました。
しかし戦争のため、厳しい生活下におかれていた住民に



は、時計を修理する余裕もないまま、昭和二十年から二十五年までの間、壊れたまま放置されておりました。

昭和二十六年に敬老の日ができ、神前地区でも老人会が結成されました。それにちなみ、寺方町一区の老人会により、新しい時計が寄贈され、青年団より老人会に時計塔の管理が委ねられました。その証として、前面の石の部分に老人会の名が明記されてあります。

昭和二年から現在にいたるまでの長い年月を住民と共に歴史を刻み歩みを共にしてきた時計塔は、今後も住民の暮らしを見守り、規則正しい時を刻みつづけてくれるでしょう。

ぼた餅もちとおはぎ

夏の厳しい暑さからようやく解放されて肌に心地よい風を感じ始めると、間もなく秋の彼岸が訪れます。

さて、彼岸とは、書物などによりますと、「至彼岸」といつて仏教から出てくる教えで、迷いのない世界に至るところいじだれいですが、彼岸は日本独自の仏教行事であつて、他の仏教国では行われていません。

また、彼岸とは春の彼岸を指し、秋の彼岸は「秋彼岸」または「後彼岸」と呼ぶのが正しいのですが、こうした仏教に関する専門的なことは別問題として、私たちの郷土では、古くから彼岸行事として先祖供養くようを行つてきました。

まず彼岸行事の一つとして墓参りを行います。口頭は人気のない墓地も彼岸の間だけは、花や線香を手に墓参りに訪れる人たちの話し声が終日絶えません。

また、仏壇には手作りの彼岸団子とぼた餅が供えられ、家族も共にいただき、ぼた餅の出来具合を批評するなど、楽しい会話がはずみます。

ほた餅とおはぎは、私たちの地域では古くから慶弔を問わず生活に密着し、なれ親しんできたものです。口頭は氣づかないままに季節を問わば、「ほた餅」と呼んでいますが、ほた餅は正確には「牡丹餅(ほたんもち)」といつて春をさします。おはぎは秋の花をイメージして作る」とから秋をさします。こうした理由から「ほた餅」「おはぎ」の名が生まれたそうです。

さて、ほた餅はいし餡、おはぎにはつぶ餡が使われるのが定番のようですが、それには理由があります。おはぎが作られる秋はちょうど小豆の収穫期であって、皮が軟らかであるといつから皮のままつぶ餡として作られます。一方、春の彼岸の頃には小豆はひと冬を越しているた



め皮が硬くなつていて、皮を取り除き、こし餡として使われてゐるようですが。

こつしてお彼岸に因むおはぎの呼びぬとひぶ餡とこし餡の違いについて述べましたが、その由來やわらかい素朴な味は、やわらかく母の温もりにも似た懐かしいものを感じるのでくれるとともに、生まれ育つたふるやうくの郷愁がよみがえつてくるのを覚えます。

わらざいく 藁細工

冠雪かんせつをいただいた鈴鹿山脈の眼下に広がる神前
冬の風物詩のように位置づいていた「すづみ」です
が、農業の機械化の進歩にともない、いつしかその
姿を見ることが少なくなってしましました。「すづ
み」は、秋の刈り入れの終わった刈田の片隅に藁帽わらぼう
子いぐしを幾段にも円錐形に積み上げて、藁細工の材料と
して保管されていたものです。

振り返りますと昭和四十年頃までは、藁細工が農
家の副業としてさかんに行われていました。神前の
藁細工は、藁を材料にして縄・蓮・かます・藁草履わらくさり
を作り、さらに高角町においては、かの有名な「高
角ふゞ」が挙げられます。



「高角ふご」の手法は大変優れていて、「水を入れても漏れない」とまで言われるほどの良品質で、他の農業地域においてもとても好評で、遠くにまで販売ルートを広げていったようです。

こうした藁細工の副業に従事できるのは主に農閑期の冬場が多く、冷たく森閑と静まり返った空氣の中に、どこの農家の家からも「カタン」「カタン」と筵を織るハタゴの音が聞こえてきました。ハタゴを使っての筵織りは力仕事ではないため、主に手先の器用な主婦が行い、主人は縄をなうといった夫婦共同の作業がなされていました。

またこの時期は、子供たちにとっても大変に心の落ちつきを覚える一時期でもありました。日頃は野良仕事で忙しい親たちとゆっくり向き合つ



ことのできない子どもたちも、この時はばかりは両親の姿を身近に眺めながら、藁のいっぱい散らばった作業場の中で、母親の織るハタゴの音を聞くとき、言ひ知れぬ安心感を覚えたものでした。また、新藁を使って織り上がった筵は青々としていて、顔を近づけると干し草の匂いが鼻孔をくすぐり、やわしく満たされた気分になりました。

こうした素朴な生活を通して、自然に親子の絆が育つていったようにも思えます。今ではこのような生活は想像も及ばない遠い過去のものとなってしましましたが、なぜか冬の田園風景をながめる度、そこには「すづみ」のある冬の田があり、藁仕事に励んでいた郷土の人々の姿がふるさとの冬の一ページとして懐かしい想いを呼び起こしてくれるのです。

掘抜井戸

「ふるやまと神前」を見ながら、散策路を保曾井神社から數地蔵へぶらりと約二百メートル歩くと道路の北側に掘抜井戸があります。

この井戸では地下水が高さ三メートルほどの中管の中から勢いよく噴出し、一分間にドラム缶約一本分（約一四リットル）の流出量があるそうです。噴出した水は、三ヵ所に分水され、用途としては主に溜池へ給水され、雑用水として使用されています。水道局の話では水量はおそらく市内随一ではないかとのことでした。



以前は現在の位置より北側に掘抜井戸がありましたが、昭和十九年十二月七日の昭和東南海地震で水が出なくなりました。現在の井戸は昭和三十八年に掘られたもので、深さは九十五間（百七十三メートル）、水温二十一度の水が連續して噴出し、現在神前地区三滝川左岸では一基認めることができるに過ぎません。

曾井町は高台に住居があり、昔から水には難儀していましたが、低地にある和泉式部化粧の水は池底の「ます」から自然に水が湧き出し、この湧水を貴重な水源として家庭用水・雑用水として利用していました。

三滝川右岸では、三滝中学校の玄関の池とその南西方面に掘抜井戸があります。

保曾井の名水（まんぽ）

曾井町の里山を散策すると、

百合ヶ谷、

夫婦池、

柿の木谷、みそれ谷、

みぞれ谷、

保曾井神社の近

くなど数多くの場所で清水が
湧き出ています。

水の恩恵を受けるその近く
では水田が開けて、米つくり
が続けられています。なかで
も保曾井神社の近くからの湧
水は、緑が豊かな宮の森の奥
深くの古くは曾井城跡だとい
われている小高い山を源とし
て豊富な清水が湧き出でていま
す。先人が安定した水を求



め、山の奥深くまで人力で掘り進み完成したのがまんぼといわれる水路です。その苦労があり一年を通じて水量が変わらないことで、保曽井神社の前に広がる農耕地は米つくりに必要な水が確保でき、収穫も安定していたと言われています。

しかし、昭和四十五年に圃場整備が施工されるとともに三重用水が導入され、保曽井神社の森から清水も必要がなくなりました。

古くは農業用水として整備された清水も、近代的な用水が整備されたのを機会にあ宮さんへ導き、「宮さんの水」として利用するようになりました。

開発されたことのない自然豊かな森から湧き出る清水は、森に生息する小鳥たちも水を飲みに訪れるほど美味しい水です。神前にお供えする水として、参拝者の手を清める水として広く使われることで、いつ



の頃からか「保曽井の名水」として親しまれるようになりました。夏は冷たくて冬は温か
く、上水道にはない味が評判で、コーヒー・緑茶の水として、また家庭で祀る神様にお供
えする水として参拝に訪れては持ち帰り、生活の水として利用され喜ばれています。

こうして四六時中湧き出る保曽井の名水はそのあと宮さん通りの小川へ流れています。
この地域では清水を活用して、鯉が泳ぎ、ホタルの舞う里にできないかと、自然に癒され
るあわいづくりの取り組みが進められています。最近はわずかではありますがホタルが
飛び交う光景を目にできるようになつてしましました。環境が整えば近い将来ホタルが乱舞する
姿も夢でなくなるでしょう。ホタルが一番必要とする水は年間を通して確保できます。あ
とは餌となるカワニナを増やし、幼虫期を過ごす住む場所を整備することが必要です。
「宮さんの水」を中心として町の活性化、住民交流の場が広がることが期待されます。

※まんば

かんがい用に用いた地下水の集中トンネル。規模は小さいが坑道を意味する。（広辞苑より）